

俳句に詠まれた那須

— 日本の近代化と西洋化の反映 —

松井 貴子

はじめに

栃木県北東部に広がる那須地域には、古代日本では「那須国」が置かれていた。「那須」という地名は古代に遡る歴史があり、現代ではブランド的価値を持つ名称として認識されているという。その一例として、自動車のご当地ナンバープレートに採用されていることが挙げられる。¹ 地勢としては、茶臼岳を始めとする那須五峰、那須高原、那須野が原として認識される。火山帯が作る温泉郷としても有名である。

この那須地域で詠まれた俳句を、「那須俳句」として、近代化と西洋化という視点から、読み解いていきたいと思う。² その前提として、まず、俳句における重要な詩的要素である季語について、明治時代以降に起きた変化についてみていきたい。

Ⅰ 近代日本の西洋受容にみる那須俳句

1 俳句の近代化—改暦と写生

十九世紀の後半、日本は、徳川幕府が政権を握っていた江戸時代から、大日本帝国政府が統治する明治時代に変わった。政府は、先進の欧米列強に追いつくために、富国強兵、殖産興業を意図して、西洋諸国から、それぞれの国が得意とする分野を選んで、お雇い外国人を招聘し、西洋式の学校制度を整備して、選ばれた優秀な男子学生を教育した。お雇い外国人に学んだ人々が、次の世代を教育し、国家有用の人材を育成する役割を担い、一部のエリート層から一般の日本国民へと、変化を広げていった。こうした国家が推進する西洋化が、当時の日本の近代化であった。

そして、人々の生活に影響を与えたのが、明治六年（1873年）に政府によって実施された突然の改暦であった。それまで使われていた様々な和暦（太陰太陽暦、太陰暦、陰暦）から太陽暦（グレゴ

リオ暦）への改変である。（ゆえに和暦は旧暦、西洋暦は新暦とも称される。）月の運行に基く旧暦は、日本の季節変化に即した農業暦として機能していた。人々の日常生活での季節感覚に即した暦が、一ヶ月ほどの間に、強制的に変えられてしまったことは、人々の生活感覚に混乱をもたらしたことであろう。

このような状況で、俳句の季語も大きな影響を受けることになった。

最も大きな変化は、季節区分の変更である。新暦に基づくと、季節感に約一か月のずれが生じることになるため、それまでは、春夏秋冬の四つの季節に区分されていたものを、冬の一部から、「新年」という季節区分を独立させて、ずれを少なくすることがなされた。

季語全体にかかわる季節区分の変更に加えて、季語は、人々の生活の変化に伴って変化してきている。使われなくなった季語は忘れられる一方、多くの事物が新たな季語として使われるようになった。

歳時記に収録される季語は、通常、「時候」、「天文」、「地理」、「生活」、「行事」、「動物」、「植物」のいずれかに分類される。「時候」は、季節の名、月の名、寒暖の変化、「天文」は、季節ごとの気象現象、「地理」は、季節ごとの山、川、海、湖、野などの様子、「生活」は、日々の暮らしの中で行われる季節に関係した事柄や物、「行事」は、日にちや期間が決まっている季節の行事で、記念日、節句、忌日（命日）など、「動物」は、その季節によく見られる動物や特徴的な外見や行動を見せる動物、「植物」は、その季節に開花、結実する植物を意味する語が分類されている。

日本の近代化に応じて、人々の生活のなかに新たに取り入れられた事物が、新しい季語として使われるようになった。時候、天文、地理では、季語

の増加がなく、生活、行事、動物、植物で季語が増加している。

俳句の近代化は、西洋美術の理論を取り入れて、文学における「写生」を提唱した正岡子規によって推進された。³これが、文学史の定説であり、揺るぎない事実でもある。俳句創作の土台となる理論が、子規の西洋受容によって、新たに構築されたことで、俳論と、それを具現する俳句作品の近代化が、子規没後も、継続して進展し、近代日本の文学にふさわしいものとして俳句が存立する場が模索されたのである。

このような俳人たちの意識的な動きに並行して、俳句の季語は社会変化の影響を受けて変化することとなった。俳人たちは必ずしも積極的に季語の改変を意図したわけではなかったと思われるが、季語もまた、近代化、西洋化と無縁ではいられなかったのである。

2 那須俳句に詠まれた近代の事物

日本が西洋受容による近代化を進めていたとき、日本全体に起こった抗いがたい動きは、人々の生活に変化を起こした。人為の変化である。西洋から日本に入ってきた新たな事物は、日常生活に定着し、俳句の材料として使われるようになった。

(1) 自然の中の近代的人工物／電車、バス、飛行機、灯り、プール

近代になっても、那須には豊かな自然が保たれていた。しかし、近代日本の開拓の手は那須を放っては置かなかった。鉄とガラスでできた近代の産物が自然のなかに入り込み、その様相が、俳句にも詠まれている。

花野ゆく御召列車を見送りぬ 植木美枝子
 (「栃木路吟行例句集」那須・烏山・国分寺)⁴

天皇、皇族を乗せた列車が、秋草が咲く那須野を通過する。那須の御用邸から東京に帰る列車であろうか。列車は、近代の産物である。初期の列車でさえ、蒸気機関が鉄製の重い車両を、人力を超えた速度で運んで行った。現代では、電気が、軽量化された車両を、さらに高速で運んでいる。野に列車が通ると、鳥の居住域と重なり、自然界

にはあり得ない速度に遭遇した鳥が、列車に衝突する事故が起こる。

バスの旅入りし那須野は大枯野 今井ヒロ
 (那須野)⁵

バスも、列車と同じく、近代の産物である。バスは人間が製造した人工物である。それが、那須に到着した。これからバスが行くのは、広大な那須野である。那須野は、枯れるという冬の自然現象を呈している。この句には、人工物と自然の対比が見える。近代の人工物は、那須の大きな自然に包含される。

雲海の切れ目に暗き下界見ゆ 原子公平 (那須)⁶

「雲海の切れ目」「下界」の語から、相当に高い位置に視点があることが読み取れる。近代の産物である飛行機から見下ろした下界を詠んでいると思われる。機内には照明があり、電気による人工的な明るさである。その対比としての、人が住まない土地の上空を飛ぶときに眼下に見えた自然のままの闇の暗さである。高山の山頂にいる可能性も推測できるが、「暗き」とあるので、夜間に登山をしていることになる。明りの乏しい山中の、雲より高い場所から、肉眼で、同じく明りの少ない下界を見ることは、那須が連山であることを考えると難しいのではないかと思われる。山にいて下界というときには、山を下りた先にある里や街を意味し、昇ってきた山や近隣の山も含めて、雲より下の世界を、すべて下界というには無理があると感じられる。

燈ともりて那須の枯野にかゝりけり 増田龍雨 (那須)⁷

灯りは人間の文明の証である。火を使うことが人間と他の動物を区別し、人は、食物の調理の他、夜間の灯りとして、火を使ってきた。火は、人を襲う動物を寄せ付けず、夜間の行動をより安全にした。電気が発明された近代に、灯りは、時に危険な火に代わって、電灯になった。電灯であれば、枯野に火災のリスクは低い。

那須高原真只中の誘蛾燈 藤沢樹村(裏那須)

8

夏には虫が多く飛ぶ。誘蛾灯は、虫が光に集まる性質を利用して、虫を集めて駆除する装置である。石油に火を灯す誘蛾灯が、田に設置されていた。石油灯が、大正時代に電球になり、昭和時代に青色の蛍光灯になった。直火から電気へ、この句にも、近代の変化が見られる。

夜の谷の水音近くプール澄む 及川貞（北温泉）⁹

プールに相当するものとして、江戸時代には水練場があったが、軍事教練のためのものであり、限られた人が使うものであった。プールが普及するのは、太平洋戦争後の学校制度によるものである。プールが一般的ではなかった時代には、川や海で泳いでいた。プールで泳ぐことが普通になると、水泳用に整備されていない自然環境で泳ぐことは難しくなる。危険を感知する感覚が育っていないからである。この句では、自然の水流のあるところにプールがある。自然の谷水は動き、人工物に張られた水は動かない。

(2) 日常生活に近代の事物が入り込む／学校教育、戦争、医学、選挙、キリスト教

近代日本に暮らした人々の生活を大きく変えたものの一つに、西洋近代に倣った学校制度がある。それまでの寺子屋や藩校とは異なり、明治政府が管轄し、日本全国で統一して行われる教育である。対外的な戦争も、人々に大きな影響を及ぼした。近代戦争の被害は甚大であったが、平和な時代の医学の発達が人々の寿命を延ばした。選挙は近代のものであり、キリスト教は江戸時代には禁じられていた。

運動会乳房あること忘れ駆く 中村草介（栃木ふるさと名句選・秋）¹⁰

運動会は、日本のほぼすべての初等、中等教育で行われる行事である。近代日本の学校教育において体育は、軍事教練の前提と位置づけられるものであった。兵役に堪えられる体力と号令に従う動作感覚を身につけさせることが目的である。学校行事とは別に、校区や町内の住民が参加する運動会も、学校の施設を使って開かれていた。この

句で詠まれているのは、そのような運動会であろう。

学校へ集まる道の四温かな 小川昇一（栃木ふるさと名句選・冬）¹¹

学校に毎日通うのは、近代日本の政府が決めたことである。現行憲法では、教育は権利であり、義務でもある。小学生のために、安全な通学路が決められている。「四温」は三寒四温の四温である。寒暖の変化を繰り返しながら、暖かい日が増えて、春になっていくことを三寒四温という。教育を受ける児童生徒は、三寒の日も、四温の日も、いつもの道を通して、いつもの教室に向かう。

繭玉を勉強部屋へ持ち込めり 吉田貞造（栃木ふるさと名句選・新年）¹²

勉強部屋は子供用の個室である。住居の中に子供室を作るという設計は大正時代に見られるようであるが、一般家庭には普及しなかった。個室が作られるようになったのは太平洋戦争後である。都市では、リビング、ダイニング、キッチンと居室の住宅で、核家族化、受験戦争の過熱で、子供が勉強部屋という個室を持つようになった。

繭玉は、蚕繭の豊作を願って作られる。近代的那須は養蚕業によっても発展した。養蚕農家の子が、家族と同じく、家業の成功を願う気持ちから、自分の部屋に繭玉を置くことにしたのであろう。

冬木立的那須野に侘し乃木神社 北山みつ（西那須野乃木神社）¹³

乃木神社¹⁴は乃木希典を祀った神社である。日本各地にあるが、那須は、乃木の別邸があった縁による。日清戦争と日露戦争で軍を指揮し、陸軍大将、学習院長となった。日露戦争で二人の息子が戦死し、乃木自身も夫婦ともに明治天皇に殉死した。大日本帝国は戦争の影に覆われている。近代日本の歴史を思い返すとき、冬枯れの木々が、なお侘しさを募らせるのである。

日当りて春まぢかなり診療所 酒井観腸（栃木ふるさと名句選・冬）¹⁵

診療所は西洋医学によって治療を施す場所である。江戸時代までは中国由来の漢方医とオランダ

由来の蘭方医がいた。明治政府はドイツ医学を採用し、近代日本は西洋医学が主流となった。国民皆保険の日本では、低い負担で医者に行くことができる。診療所を身近に感じている様子が、春になりつつある日ざしの快さに重ね合わされている。

一票を蝌蚪にも頼み選挙カー 和気康之（矢板・塩谷）¹⁶

立候補者が、選挙権を持つはずのない蝌蚪（オタマジヤクシ）にまで、投票を依頼している。投票日が近づくにつれて、なお必死に自分への投票を呼び掛ける選挙カーのアナウンスは、騒音に近い音量になり、迷惑に感じることもさへある。ユーモラスに詠まれているが、選挙権が、近代民主主義国家の試金石であることを考えさせる句である。

牛の餌を雀がぬすむ万愚節 広瀬翔（栃木ふるさと名句選・春）¹⁷

万愚節はエイプリルフールのことである。季語としては、直訳した「四月馬鹿」も使われる。その起源には諸説ある。キリストの命日にユダの裏切りを忘れないためであったり、インドの仏教徒が春分から三月末まで修行を行った後すぐに俗世にもどってしまうため、四月一日に揶揄したこと、フランスで四月一日が新年だったのを、王がグレゴリオ暦を採用して一月一日に変更したことに反抗して、四月一日を「嘘の新年」として馬鹿騒ぎをするようになったことなどである。大人が嘘をついてもよい日であり、子供がいたずらをするのが許される国もある。雀が牛の餌を横取りしても許されるであろう。

連翹の目に沁む雨の復活祭 河野紀代乃（栃木ふるさと名句選・春）¹⁸

復活祭は、キリスト教の行事である。江戸時代初期に出された禁教令が、明治時代に緩和された。信教の自由が保障されるのは日本国憲法によってである。復活祭では、キリストが処刑の三日後に蘇ったことを祝うと同時に春の訪れを喜び合う。復活祭の日には、春分の後の満月の直後の日曜日と決められるので、年によって、三月あるいは

四月になる。連翹は、この時期に鮮やかな黄色の花を咲かせ、実は薬効がある。イースターエッグがつるされることもあるという。雨に濡れた花色が、目に刺激を与えている。

II 那須俳句に特徴的な西洋近代

日本の近代化の過程で、那須地域に特徴的に起こった変化は、牧場の創設である。そこで飼育された牛や馬が多くの俳句に詠まれている。酪農として牛が飼われ、軍馬の供給のために馬が飼育された。牧場は、現在では、観光資源にもなっている。また、東京が首都となったことで、天皇が京都から東京に移住し、首都圏の他、各地に御用邸が作られた。そのうちの一つが那須にあり、これも句材になっている。

1 牧場の牛、馬、御用邸

那須野が原は、明治政府の殖産興業政策により、開拓された。それまでは、水に恵まれない原野であった。印南丈作、矢板武を中心とする那須開墾社が、明治十八年（1885年）に那須疎水を開いたことにより、開拓が大きく進展した。那須疎水は、福島の安積疎水、滋賀・京都の琵琶湖疎水と並んで、日本三大疎水と言われている。¹⁹

三島通庸が指導した^{ちようこうしや}肇耕社が華族農場の最初となり、いくつもの大農場が開かれた。松方正義が開いた千本松牧場²⁰が現在に残っている。

(1) 牧場／酪農、牛

那須地域には、現在も数多くの牧場があり、本業としての酪農を、観光業にもしている。観光化することで、事業継続の安定を図ることは、前近代から続く伝統産業でも行われている。地域文化と観光の結びつきは、その継承のために必要になっているのであろう。

散る花に寝そべりながき牧の牛 八木沢高原（千本松農場）²¹

千本松農場は、1893年に開かれた西洋式の大規模農場である。松方正義が、那須開墾社から買い取った土地に天然のアカマツが密生繁茂していたことから、「千本松」と名づけ、牧場の名になった。現在は、酪農業を行う観光牧場である。

広大な牧場の敷地には、放牧場だけでなく、桜並木、紅葉林がある。牧牛が、体を伸ばして、ゆったり寝そべるのは、いかにも春らしい光景である。

黒き瞳の仔牛生れて金鳳華 黒羽外城（南那須）²²

金鳳華は、五弁の黄色い花で、馬の足形ともいう。晩春の季語である。牛の眼は黒目がちである。穏やかな眼をしている牛は温和な性格で、瞼が重そうに見える牛は警戒心が強く神経質であるという。牛の瞳の黒色と金鳳花の黄色の対比が鮮やかである。

牧若葉泡立つ乳の搾りたて 黒子美智子（那須）²³

搾りたての牛乳を飲めるのは牧場ならではのことである。牛の体温の温もりと、乳絞りのときにできた泡が残る牛乳の新鮮さに敵うものはない。牧場の関係者だけが味わうことができるものであったものが、観光牧場のおかげで、一般の人々も楽しめるものになったのである。

夏休黒牛に触る一大事 日賀野洋子（栃木ふるさと名句選・夏）²⁴

夏休みは観光牧場の書き入れ時である。牛に触るところか、本物の牛を見たことがない人々も、家族連れで訪れるのである。牛は、想像を超える大きさで眼前に存在する。安全には十分に配慮されていても、牛に触るには勇気がいる。一大決心をして触った後も、手に残る牛の感触に、また、一騒ぎであろう。子供たちの夏休みの挑戦である。

花かぼちゃ牛のお産を手伝へり 脇坂啓子（「栃木路吟行例句集」那須・烏山・国分寺）²⁵

南瓜は夏に黄色い花を咲かせる。牛の出産は年一回で、発情は二十一日周期であるため、牛乳の需要を見込んで乳牛に種付けをするという。「猫の恋」という季語のある猫と異なり、発情の時期が一定しないので、「牛生まる」「仔牛」は季語ではない。牛は十か月の妊娠期間の後、三十分から四十分かけて出産する。ほとんどの仔牛が頭から生まれてくるが、難産になった場合は、産道に見えてきた仔牛の足にロープをかけて介助する。²⁶

この句に詠まれた牛も、このような状況であったのであろう。

炎天の牧場に牛の塩を置く 中条九三夫（那須）²⁷

塩は動物の生命維持に不可欠なものであるが、草食動物である牛は、牧草から塩分を得ることができない。野生の牛は、天然の岩塩や塩水を探して塩分を補給する。牧場の牛には、飼料の他に、塩のブロックを置く。夏は他の季節よりも塩分を必要とする。暑さに弱い牛は、塩を舐めて、夏を乗り切るのである。

峰雲や牛の水呑む音聞こゆ 鍋嶋廣子（那須）²⁸

峰雲は夏の積乱雲である。暑い夏には、他の季節よりも水分が必要になる。乳牛は、乳量の二〜三倍の飲水が必要であり、飲水量の多い牛ほど、乳量が多くなる。牛が水を飲む音は、豊かな搾乳を期待させるものなのである。

析の花サイロに長き梯子掛け 三好かほる（那須）²⁹

析の木は、栃木県の県木である。初夏に黄白色の細かい花が円錐状に集まって咲く。サイロは、円筒形の貯蔵庫である。牧草を圧縮貯蔵して発酵させると、サイレージという、牛が喜ぶ餌になる。背の高いサイロに草を詰める作業も、サイレージを牛舎に運ぶ作業も重労働で、サイロの維持管理も大変であるため、近年はサイロが使われなくなっている。昔ながらにサイロに梯子が掛かっているのは、数少ない稼働中の貴重なサイロである。

今朝生れし仔牛眠れり夏の星 斉藤敬子（那須）³⁰

牛のような草食動物は、捕食動物から身を守るために群れで行動する。生まれてすぐに立ち上がって、自力で動けるようにならなければ、野生での生存は叶わない。牧場の牛は命の危険のない環境で生まれ育つ。安全な牧場の仔牛は、生まれた日の夜から、ゆっくり眠ることができる。

乳牛のどたりとねまる盆の秋 齋藤一郎（南

那須)³¹

盆の時期は、関東と関西で異なっている。旧暦七月十三日から十六日の盂蘭盆会が、関東は新暦七月、関西は新暦八月である。新暦と旧暦が併存するのは、明治時代に行われた改暦の影響である。新暦の日付で一か月遅れにすると、旧暦のときの季節感に近くなる。「盆の秋」という季語を使うことによって、関東地方の那須で、旧暦の盆の季節感を表わしている。

秋雲に最も近き牛の群れ 石塚瑛子(那須)³²

秋には一年のうちで最も空気が澄んで空が高く見える。その空に現れては消えるのが、鬮雲のような小さな雲が連なった秋の雲である。那須高原にいる牛たちは、それだけ、天に近い所にいるのである。

散らばりし牧牛霧に鈴鳴りて 馬渡鼎(那須)³³

霧は放射冷却で気温が下がると生じる。冷気が滞留しやすい盆地に多い。内陸の那須は昼夜の気温差が大きく、霧が出る条件に適っている。秋の牧場が霧に覆われて、放牧牛たちが見えなくなったが、首につけた鈴の音が、大きいか小さいか、高いか低い、遠いか近い、その聞こえ方で、どの牛がどこにいるか、日々、牛の世話をしている牧人は判断できるであろう。

放牧の牛の向き向き霧晴るる 吉川康子(那須)³⁴

牧場に満ちていた秋の霧が晴れて、それまで見えなかった牛の姿が見えてきた。放牧場にいる牛たちは、自由に行動できる。牛舎に入る牛たちのように同じ方向を向いていない。牛たちの性格や群れのなかでの序列が反映した場所取りが見える。

白々と続く牧柵鳥わたる 中尾清子(那須)³⁵

渡り鳥は秋に群れをなして北方から日本にやってくる。季節によって生息地を変える鳥である。羽根を持たない人間は、空を飛ぶ鳥に自由を感じる。牧場に飼われている牛は柵の外に自由に出ることはない。牧牛と渡り鳥の境遇を対比して眺めている。

牧の牛草の実をつけ帰り来る 尾崎きよ(那須)³⁶

秋の終わりには、様々な草が実をつける。昼間の放牧から戻ってきた牛が何かの草の実をつけていた。放牧地の草も実をつける季節になったことを、牛が教えてくれたのである。

秋惜しむかに長鳴きの牧の牛 伊藤トキノ(南那須)³⁷

秋が終わらないでほしいと思う気持ちを表わすのが、「秋惜しむ」の季語である。牛は暑さに弱いが、寒さには比較的強い。それでも、冬は病気になりやすいので、放牧をやめて牛舎に入れる。外に出られなくなる冬を嫌がって、牛が声長く鳴いていると見ているのである。

着ぶくれて牧の厠を借りにけり 栃木静子(栃木ふるさと名句選・冬)³⁸

冬の寒さに耐えるために、衣服を何枚も重ね着すると「着ぶくれ」になる。そうしても、牧場にいると外気にあたって、体が冷えてくる。冬の那須の空気は凍てている。防寒対策をしたつもりでも、生理現象は避けられなかった。

親子牛語らふに似て息白し 石原清美(那須)³⁹

冬、寒くなると、呼気が白く見える。吐いた息の量や勢い、進んでいく方向が見えるようになるのである。牛の呼気も白くなっていた。親牛の息と仔牛の息が対面して交錯する様子が、擬人化されて、会話をしているように見えたのである。

(2) 馬／軍馬、荷馬、農耕馬

馬は、前近代から人々の暮らしの中にあつた。農耕馬、荷馬、騎馬など、様々な使われている。近代になっても、鉄道や車、農業機械などが普及するまで、馬は有用に使われた。明治政府は、殖産興業と同時に富国強兵を国策とした。そのために、組織的に軍馬を飼育することが必要になった。陸軍が東京を本部とする軍馬養成所(軍馬補充部)を設立し、北海道、宮城、福島、宮崎、朝鮮などに支部を置き、平時で四万頭の軍馬が飼育された。白川支部のもとに、那須派出所が置かれ、広大な

放牧場、飼料畑に専門の人員と設備を整えて、数百頭の強健な軍馬が育成されていた。⁴⁰

夏草の暗きに軍馬供養の碑 山崎ひさを（黒羽）⁴¹

那須は軍馬の産地であった。徴用された兵士とともに、多くの馬が戦争の犠牲になった。農耕馬であったものが軍馬に徴用されることもあったという。戦争犠牲者の慰霊碑と同じく、軍馬にも供養碑が建てられている。夏草の季語は、敗戦日の記憶と重ねられる。

うひうひしかりしは那須の子馬たち 後藤比奈夫（那須）⁴²

太平洋戦争後は、馬が戦死することはなくなった。那須では、馬の調教、馬術の普及活動、競技を引退した馬の飼育などが行われている。戦争を知る作者は、来し方を思い起こしながら、戦場に行くことはない子馬の様子を見ていたであろう。

仔を離して母馬霧を踏む虚ろ 長谷川明子（南ヶ丘牧場）⁴³

南ヶ丘牧場では、現在、ヨーロッパとアメリカ原産の四種類の馬が飼育されており、乗馬や餌やりを体験できる。子馬は、生後三～四か月以降、離乳するが、「栄養面の自立」と「精神面の自立」の両面から行われる。三週齢までの子馬は母馬から五メートル以内にいるが、十四週齢までに母馬との距離が十五メートルになる。他の子馬との距離は四週齢までは百メートルほどあるが、十六週齢で三十メートルまで縮まり、群れのなかで精神的に自立する。離乳にはストレスが伴うので、子馬のストレス軽減が最優先される。複数の母子馬の群れから、段々に母馬を連れ出して、子馬だけの群れにするのである。⁴⁴ 子馬の自立のために引き離された母馬は、子馬のストレスや空虚感を強く感じているのであろう。

山蟬の音を身に巻きて裸馬 飯田龍太（裏那須）⁴⁵

この裸馬は、本格的な調教を受ける前の馬であろうか。子馬の頸椎を守るために、首への紐かけは慎重に行われる。山にいる蟬が短い命の間に懸

命に鳴き続けるように、この馬も、自然のままに自由にいられる短い時間を全身で楽しんでいるのであろう。

天の川高原に馬放ち飼ふ 岡田日郎（裏那須）

⁴⁶

高原の上空に天の川が横たわっている。天地ともに広大な空間が広がる那須高原の光景には、都市の光景からは得られない感動がある。このような高原に放牧飼育される馬は、人にも物にも遮られることなく、存分に駆け回っている。

放牧の馬の睫毛の霧雫 伊藤淳子（那須）⁴⁷

馬の睫毛は、密生していて、とても長い。目に異物が入らないようにする機能の他、顔の両側に出っ張り気味にある目の近くに危険なものがあることを感知するセンサーの働きをしているという。この馬は、霧から生じた水分は危険ではないと認識していて、邪魔にも感じていないので、睫毛に載せたままである。

那須^{かげ}戻り馬の鬣^{たてがみ}冬ざるる 小松崎爽青（那須）⁴⁸

「冬ざるる」は、冬の荒涼とした感じを表わす季語である。凍てつく寒さの中で力強く活動するのは、ごく少ない。内陸の那須では、平地や沿岸部の都市よりも、ずっと厳寒に感じられる。那須では、積雪もある。日ざしが遮られて、冬陽の恩恵を得られなければ、寒さはもっと厳しくなる。耐えるしかない、その厳しさが、寒さの中にじっと佇む馬の鬣に集約されているのである。

次からの四句は、「厩出し」を詠んだものである。雪深い地方では、冬の間、風雪に当てないように、牛や馬を厩に入れる。雪が消えて、草が萌える春になって、外に出された牛馬は、日光浴し、蹄を固める。このとき、冬の間に使っていた厩の敷き藁が取り換えられ、肥料にされる。牧場では「牧開き」ともいう。⁴⁹

厩^{まや}出しや吹きつさらしの那須の原 阿波野青畝（裏那須）⁵⁰

冬の間、厩で寒さを凌いでいた馬たちが、春に

なったので、外に出される。那須の春は、まだまだ浅く、暖かいとは感じられない風を遮るものもない。狭い屋内から、広い屋外に出られるのであるが、すべての馬が喜ぶわけではないのかもしれない。

厩出し那須の噴煙沖しけり 高野童眞(那須)
51

「沖す(る)」は、高く上がることである。那須の噴煙は、茶臼岳から上がっている。那須岳ともいわれる活火山である。八合目までロープウェイが通り、その先の山頂までは、歩道で登ることができる。厩から出された馬の動きが見える近景と、白い噴煙が空高く上がっていく動きが見える活火山の遠景の対比が那須の広大さを感じさせる。

那須岳の午後より晴れて厩出し 津田美代子(那須)⁵²

昼前に山を覆っていた雲が晴れて、山の姿が現れてきた。春の日ざしが戻って、気温が上がり、春らしい午後になった。このような環境であれば、冬の厩から解放される馬たちも喜ぶことであろう。

那須岳の噴煙白き厩出し 岡安迷子(那須岳)⁵³
既出の二句を合わせて詠まれたような句である。春の那須岳の定番の句材となるのが、厩出しと白い噴煙なのである。俳人たちが、那須岳に吟行に出かけて句を詠むならば、句材の重複は避けられず、類句を咎めることはできない。類想を避けるべく、独創的な句を作ることが、俳人の腕の見せどころになるであろう。

次からの七句は、トテ馬車のように車を牽いて労働する馬を詠んでいる。トテ馬車は、明治三十七年に始まった乗合馬車が起源と言われている。馬車を運行するときにラッパを吹いて、その音が「トテ」と聞こえたことから、「トテ馬車」という名がついたという。この馬車は、汽車で塩原まで来た客を、その先の温泉街まで運んでいた。最盛期には、トテ馬車屋七件、馬車二十六台を数えたという。車やバスが普及してからは、名所めぐりの観光遊覧馬車となった。馬一頭が十二人乗

りの車両一台を牽いている。⁵⁴

トテ馬車の喇叭のひびき夏はじめ 杉良介(塩原)⁵⁵

トテ馬車という名称の語源は、喇叭(ラッパ)の音にある。トテ馬車にラッパの音は、付き物なのである。夏には、長い夏休みがあり、観光客が増える季節である。景気の良いラッパの音が、この夏も盛況であるようにという期待を盛り上げている。

稲妻やトテ馬車の馬解かれをり 高岡良子(塩原)⁵⁶

トテ馬車の運行は四月に始まる。運行の終了は十一月で、立冬を過ぎれば、暦の上では冬に入る。季語としての稲妻は、秋のものである。秋の雷が、稲を突らせると信じられていたことによる。春に始まった客車牽きの仕事が終わって、馬の引き綱を外す。馭者も馬も、一緒に、疲れと安堵と解放感を感じていることであろう。

馬啼きて高原の宿明易し 小林螢二(那須)⁵⁷

夏は昼の時間が長く、夜の時間が短い。夜明けの時刻が早いので、季語として「明易し」という。日本に住む、ほとんどの人は、人工の灯りを使って、時計に従って暮らしている。那須高原の牧場で飼育される動物たちは、自然の光を感じて暮らしていて、夜明けの早い夏には、馬の目覚めも早くなるのであろう。那須高原に宿泊する人は、普段は、馬よりも遅い時間に起きていて、まだ起きる時間ではなかったが、馬の鳴き声で目が覚めて、夏の夜明けが早いことを実感したのである。

繭袋馬車まで担ぐ二つ折り 植木火雪(栃木ふるさと名句選・夏)⁵⁸

養蚕は近代日本を支えた産業であった。那須でも良質な繭が作られた。道路が整備され、自動車が普及するまでは、馬は、重要な運搬手段であったが、荷を馬車まで運ぶのは人力である。繭を一杯に詰めた袋は、人の肩や背中より大きいものになったのであろう。荷馬車用のサイズに梱包された繭袋が、二つ折りにされて、人間用のサイズに調整されているのである。

幌馬車の油切れ鳴る花野かな 野村喜舟（黒磯市）⁵⁹

かつては、長距離の移動や荷運びに使われた幌馬車であるが、現在は、観光に使われることがほとんどであろう。千本松牧場には、牧場内を巡る遊覧馬車の他に、固定して展示されている幌馬車があり、昔ながらの姿をみせている。句に詠まれているのは、動く幌馬車である。秋の花が咲く野原には、春のような華やかさとは違う趣がある。原野の面影を遺す高原に似つかわしい季語である。車輪の油が切れて、滑りが悪くなった。車輪が軋んで、自然界にはない音が聞こえてきた。自然と人工の共存である。

鞍干して憩ふ馬丁ら草の花 小俣幸子（那須）⁶⁰
馬丁の仕事は馬の世話をすることである。現在では厩務員という。競馬では騎手と厩務員は別である。この句に詠まれた馬丁の人々は、一緒に働いてくれる馬の世話や馬具の手入れを職務としているのであろう。神経を使う名馬の世話ではなく、ゆったりとしている様子が、「草の花」という季語と響き合っている。

秋暑し湖畔に老いし馬と馭者 渡辺登美子（那須）⁶¹

馭者は、馬車に乗って馬を操る人のことである。現在は「御者」と表記する。長年、苦楽を共にして働いてきた馬と馭者は同じく歳を重ねている。「御者」よりも「馭者」の表記がふさわしい。「秋暑し」の季語には、秋になったのに暑いというニュアンスがある。八月初めに立秋を迎えて、暦の上で秋になっても、実感として暑さを感じるときに使う。無理をして働かないで、湖畔で涼んでいるのかもしれない。

(3) 天皇／御用邸

那須御用邸は、本邸が大正十五年、付属邸が昭和十年の建築で、昭和天皇は、この御用邸を好み、付近一帯の植物を調べていたという。大正天皇は、日光の田母沢御用邸と塩原の御用邸（三島通庸が別荘を献上したもの）に滞在していた。静養や疎開のために多くの皇族が滞在したが、現在は、記

念公園となっている。首都圏には、那須御用邸の他、神奈川の葉山御用邸、静岡の須崎御用邸がある。⁶²

天皇は那須に^{おわ}座しぬ震災忌 藤田湘子（那須）⁶³
「震災忌」は大正十二年（1923年）の関東大震災の日、九月一日である。東日本大震災が起こる前は、那須地域では地震が起きないと考えられていた。そのため、首都機能移転の候補地になったこともある。そのような那須の地に御用邸があり、天皇が、震災被害の大きかった東京ではなく、震災の被害を受けないであろう那須に滞在していることに思いを馳せている。震災の記憶を思い起こさせる日の感慨であろう。

郭公や今は留守なる御用邸 松根東洋城（那須御用邸）⁶⁴

天皇や皇族が一定期間の静養を終えると、御用邸には主がいなくなる。主の滞在中は賑やかであった御用邸が、ひっそりと静まり返る。御用邸の周りに生息している郭公は、主がいなくなっても変わらず鳴いているのであろう。御用邸の人の声や生活音が消えた分、郭公の鳴き声は大きく聞こえてくる。

虫鳴いて天皇の居ぬ御用邸 田代靖（那須）⁶⁵

虫が鳴くと秋が来たことを感じる。虫の音は美しいものであるが、次には冬が来ることがわかっている。さびしさを感じさせるものでもある。冬には動植物の活動が低下し、死んだようになる。虫の声は、命の儂さも感じさせる。夏の静養を終えて天皇がいなくなった御用邸のさびしげな雰囲気には虫の声が重なっている。

御用邸はるかに望む花野かな 植木美枝子（那須）⁶⁶

那須御用邸は、鉄道からも、幹線道路からも離れていて、森の木々に深く囲まれている。一般人は立ち入り禁止である。御用邸から相応の距離をとった地域では森が切り開かれて、草花が咲く土地を残しつつ、観光ホテルが何件も建っている。このような場所から御用邸の建物を見ることは難

しいと思われるが、伊勢神宮を遥拝するように、御用邸を遥拝しているのかもしれない。

¹ 那須塩原市によると、那須地域は、行政区域としては、那須塩原市（黒磯市、西那須野町、塩原町が合併）、那須郡（那須町、那珂川町）、広義には、大田原市（大田原市に湯津上村、黒羽町を編入）、矢板市、塩谷町が含まれる。那須烏山市（南那須町、烏山町が合併）を那須地域とするかどうかは認識が分かれているという。

² 本稿は、「令和元年度那須文化セミナー 那須と文学—作品に込められた那須の魅力とは—」の「第4回俳句に詠まれた那須」（令和元年11月16日（土）那須野が原博物館）に加筆したものである。

³ 子規の西洋受容と「写生」提唱による日本文学の近代化については、拙著『写生の変容—フォントネージから子規、そして直哉へ』（2002・2 明治書院）で詳細に考察した。

⁴ 『栃木吟行案内』194頁

⁵ 『関東ふるさと大歳時記』399頁

⁶ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁷ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁸ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁹ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

¹⁰ 『関東ふるさと大歳時記』409頁

¹¹ 『関東ふるさと大歳時記』409頁

¹² 『関東ふるさと大歳時記』409頁

¹³ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

¹⁴ 那須乃木神社 HP <https://www.nasu-nogijinja.jp/> 2020・5・30日

¹⁵ 『関東ふるさと大歳時記』409頁

¹⁶ 『栃木吟行案内』187頁

¹⁷ 『関東ふるさと大歳時記』408頁

¹⁸ 『関東ふるさと大歳時記』408頁

¹⁹ 「那須野が原開拓」栃木県 HP 2020・5・10日

http://www.pref.tochigi.lg.jp/c05/kensei/aramashi/rekishi/bakumatsu-kingendai_07.html

²⁰ 「千本松牧場の歴史と自然」那須千本松牧場 HP <http://www.senbonmatsu.com/history/> 2020・5・30日

²¹ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

²² 『栃木吟行案内』147頁

²³ 『栃木吟行案内』154頁

²⁴ 『関東ふるさと大歳時記』408頁

²⁵ 『栃木吟行案内』194頁

²⁶ 「乳牛のライフサイクル」茨城県酪連 HP http://www.ibarakuren.or.jp/chishiki/rakunou/life_cycle.html 2020・5・31日

²⁷ 『栃木吟行案内』154頁

²⁸ 『栃木吟行案内』153頁

²⁹ 『栃木吟行案内』153頁

³⁰ 『栃木吟行案内』154頁

³¹ 『栃木吟行案内』147頁

³² 『栃木吟行案内』153頁

³³ 『栃木吟行案内』154頁

³⁴ 『栃木吟行案内』154頁

³⁵ 『栃木吟行案内』153頁

³⁶ 『栃木吟行案内』154頁

³⁷ 『栃木吟行案内』147頁

³⁸ 『関東ふるさと大歳時記』409頁

³⁹ 『栃木吟行案内』153頁

⁴⁰ 「軍馬補充部高津牧場事務所、土塁、境界石」那須町の文化遺産 HP 那須町文化協会 2020・5・10日

<http://nasu-bunka.jp/043/>

⁴¹ 『栃木吟行案内』119頁

⁴² 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁴³ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁴⁴ 「JRA 育成牧場管理指針」JRA 中央競馬会 HP

http://jra.jp/training/pdf/research_seisan.pdf 2020・5・31日

⁴⁵ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁴⁶ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁴⁷ 『栃木吟行案内』153頁

⁴⁸ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁴⁹ 『新歳時記（春）』91頁

⁵⁰ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁵¹ 『栃木吟行案内』153頁

⁵² 『栃木吟行案内』153頁

⁵³ 『関東ふるさと大歳時記』400頁

⁵⁴ 「トテ馬車」とちぎ旅ネット 2020・5・10日

<https://www.tochigiji.or.jp/spot/6751/>

「那須塩原便り」那須塩原の観光情報（公式）：ココシル那須塩原 HP 2020・5・10日

<https://home.nasushiobara.kokosil.net/ja/archives/10664>

⁵⁵ 『栃木吟行案内』187頁

⁵⁶ 『栃木吟行案内』187頁

⁵⁷ 『栃木吟行案内』153頁

⁵⁸ 『関東ふるさと大歳時記』408頁

⁵⁹ 『関東ふるさと大歳時記』401頁

⁶⁰ 『栃木吟行案内』153頁

⁶¹ 『栃木吟行案内』154頁

⁶² 「御用邸」栃木県 HP 2020・5・10日

http://www.pref.tochigi.lg.jp/c05/kensei/aramashi/rekishi/bakumatsu-kingendai_08.html

「御用邸」宮内庁 HP 2020・5・10日

<https://www.kunaicho.go.jp/about/shisetsu/kokyo/goyotei.html>

⁶³ 『関東ふるさと大歳時記』398頁

⁶⁴ 『関東ふるさと大歳時記』400頁

⁶⁵ 『栃木吟行案内』154頁

⁶⁶ 『栃木吟行案内』154頁

参考文献

加藤楸邨、角川文化振興財団編 ふるさと大歳時記2『関東ふるさと大歳時記』1991・6 角川書店

水沼三郎他編『栃木吟行案内 吟行案内シリーズ ⑰』1999・7 俳人協会

落合雄三他編『栃木県近代文学アルバム』2000・7 栃木県文化協会・随想舎

加藤楸邨・大谷徳藏・井本農一監修、尾形仵・草間時彦・島津忠夫・大岡信・森川昭編『俳文学大辞典』平成7・10 角川書店

平井照敏編『新歳時記（春）』1989・3、1996・12

改訂版 河出書房新社
 平井照敏編『新歳時記（夏）』1989・6、1996・12
 改訂版 河出書房新社
 平井照敏編『新歳時記（秋）』1989・8、1996・12
 改訂版 河出書房新社
 平井照敏編『新歳時記（冬）』1989・10 初版、
 1996・12 改訂版 河出書房新社
 平井照敏編『新歳時記（新年）』1990・1 初版、
 1996・12 改訂版 河出書房新社
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 春』1973・4
 初版、1977・10 7版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 夏』1973・7
 初版、1977・10 7版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 秋』1973・9
 初版、1978・2 6版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 冬』1973・
 10、1977・10 6版 角川書店
 角川書店編『図説 俳句大歳時記 新年』1973・
 11、1978・2 5版 角川書店

俳人一覧

原子公平

大正8(1919)年、北海道小樽生まれ、平成16(2004)年没。旧制三高在学中に「馬酔木」に投句し、後に、加藤楸邨に師事し、「寒雷」同人となる。戦後、沢木欣一と「風」を創刊し、社会派俳句を推し進めた。昭和28(1953)年に「萬緑」同人となり、昭和47(1972)年に「風濤」を創刊主宰した。感受性の鋭い柔軟な句風である。(『俳文学大辞典』769-770頁)

増田龍雨

明治7(1874)年、京都生まれ、昭和9(1934)年没。江戸俳諧の俳人で、遊郭の書記をしていた。三田文学の久保田万太郎を好んでいた。「明治の町屋、姫路の春霜堂」HP <https://plaza.rakuten.co.jp/nanako0112/2033/> 2020・5・24日)

藤沢樹村

大正13(1924)年生まれ。句集『どの径ゆくも』(2007・3 喜怒哀楽書房)、『戦地最後の初年兵一その回想俳句と短歌』(2009・3 喜怒哀楽書房)がある。(国立国会図書館 HP <https://rnavi.ndl.go.jp/books/2009/07/000010073066>。

php、アマゾンジャパン HP https://www.amazon.co.jp/gp/product/4902261081/ref=dbs_a_def_rwt_bibl_vppi_il
https://www.amazon.co.jp/gp/product/4902261197/ref=dbs_a_def_rwt_bibl_vppi_i0、
 2020・5・24日)

及川貞^{てい}

明治31(1898)年、東京生まれ、平成5(1993)年没。昭和8(1933)年から「馬酔木」に投句し同人となる。句集『夕焼』(1967)で、第7回俳人協会賞を受賞した。句風は、淡々とした日常を自由奔放に、情趣深く詠む。(『俳文学大辞典』105頁)

中村草介

昭和43(1942)年生まれ。句集『風峠』(2004・10 角川書店)がある。(国立国会図書館 HP <https://id.ndl.go.jp/auth/ndlna/00973285> 2020・5・24日)

和気康之

塩谷町に同一人物と推定される同名の詩人がいる。昭和17(1942)年、栃木県玉生村生まれ。実家は肥料屋で、法政大学卒業後、平成9(1997)年までレストランを経営した後、財団法人和気記念館館長となる。栃木県現代詩人会会員、詩誌「馴鹿」同人で、詩集『夢夢』(2001・7 土曜美術社出版販売)がある。(アマゾンジャパン HP <https://www.amazon.co.jp/%E8%A9%A9%E9%9B%86-%E5%A4%A2%E5%A4%A2-BOU-%E5%92%8C%E6%B0%97-%E5%BA%B7%E4%B9%8B/dp/481201297X> 2020・5・24日)

八木沢高原

明治40(1907)年生まれ。自註現代俳句シリーズ(第4期52)『八木沢高原集』(1982・2 俳人協会)がある。(国立国会図書館 HP <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000001559035-00> 2020・5・24日)

脇坂啓子

句集『巖門』(2002・2 角川書店)がある。(アマゾンジャパン HP <https://www.amazon.co.jp/%E5%B7%96%E9%96%80%E2%80%95>。

%E5%8F%A5%E9%9B%86-%E8%84%87%E5%9D%82%E5%95%93%E5%AD%90/
dp/4048719130 2020・5・24日)

三好かほる

昭和14(1939)年、香川県丸亀市生まれ。昭和37年京都女子大学卒業。平成2(1990)年「風」に入会し、平成9(1997)年「風」同人となる。平成14(2002)年「風」終刊により、「万象」創刊同人となった。俳人協会会員、国際俳句交流協会会員で、句集『明日香』(2006・10 角川書店)がある。(アマゾンジャパン HP <https://www.amazon.co.jp/%E5%8F%A5%E9%9B%86-%E6%98%8E%E6%97%A5%E9%A6%99-%E4%B8%89%E5%A5%BD-%E3%81%8B%E3%81%BB%E3%82%8B/> dp/404876277X 2020・5・24日)

伊藤トキノ

昭和11(1931)年、岩手県生まれ。昭和31(1956)年、秋元不死男の「氷海」に入会し、昭和33(1958)年に第7回氷海賞を受賞して、昭和34(1959)年氷海同人となった。昭和53(1978)年、鷹羽狩行主宰「狩」に同人参加し、昭和60(1985)年・62(1987)年第6回・第8回巻狩賞(同人賞)を受賞した。平成21(2009)年茨城文学賞受賞。狩白羽同人、俳人協会幹事で、伊藤トキノ句集『花巻』(2011・12 ふらんす堂)がある。(アマゾンジャパン HP <https://www.amazon.co.jp/%E8%8A%B1%E5%B7%BB%E2%80%95%E4%BC%8A%E8%97%A4%E3%83%88%E3%82%AD%E3%83%8E%E5%8F%A5%E9%9B%86-%E4%BC%8A%E8%97%A4-%E3%83%88%E3%82%AD%E3%83%8E/> dp/4781404073 2020・5・24日)

山崎ひさを

昭和2(1927)年、東京生まれ。NHK社員を経て、俳人協会に勤務した。師系は、通信省で放送行政を行い、俳人協会事務局長であった岸風三樓で、『青山』を主宰した。(『俳文学大辞典』203、927頁)

後藤比奈夫

大正6(1917)年大阪生まれ。昭和27

(1952)年、父夜半のもとで俳句を始め、昭和29(1954)年から『諷詠』を編集し、昭和51(1976)年から主宰した。昭和36(1961)年に「ホトトギス」同人となり、高浜虚子の客観写生を進める。句集『喝采』(2019・7 ふらんす堂)がある。(『俳文学大辞典』298頁、アマゾンジャパン HP <https://www.amazon.co.jp/%E5%96%9D%E9%87%87-%E5%BE%8C%E8%97%A4-%E6%AF%94%E5%A5%88%E5%A4%AB/> dp/4781411827 2020・5・24日)

飯田龍太

大正9(1920)年、山梨県(境川村)生まれ。平成19(2007)年没。飯田蛇笏の四男。昭和16(1941)年から、俳句を始め、「雲母」の編集を担当し、昭和37(1962)年に蛇笏から主宰継承する。昭和32(1957)年に現代俳句協会賞、昭和44(1969)年に読売文学賞、昭和56(1981)年に芸術院恩賜賞を受け、昭和59(1984)年に芸術院会員に推された。平成4(1992)年、「雲母」を、900号をもって、自ら終刊した。(『俳文学大辞典』33 - 34頁)

岡田日郎

昭和7(1932)年、東京生まれ。太平洋戦争後、俳句を始め、福田蓼汀主宰の「山火」に投句した。昭和27(1952)年から、「山火」の編集を担当した後、昭和63(1988)年に主宰を継承した。平成5(1993)年、俳人協会賞を受賞し、俳人協会理事、俳句文学館図書室長となった。自ら実践する山岳俳句に定評がある。(『俳文学大辞典』118 - 119頁)

小松崎爽青

大正4(1915)年、茨城県生まれ。平成15(2003)年没。昭和7(1932)年、大竹孤悠主宰「かびれ」に入会し、昭和30(1955)年から編集担当を経て、昭和55(1975)年に主宰を継承した。(『俳文学大辞典』305頁、「小松崎爽青氏死去／俳人」四国新聞社 HP <http://www.shikoku-np.co.jp/national/okuyami/article.aspx?id=20030111000223> 2020・5・24日)

阿波野青畝

明治32(1899)年、奈良県生まれ。平成4(1992)年没。原田浜人^{ひんじん}に師事した後、昭和11(1936)

年創刊の「山茶花」野村泊月選で、しばしば巻頭を占め、「ホトトギス」でも活躍し、昭和13(1938)年に課題句選者となった。昭和3(1928)年、山口青邨による講演で、水原秋桜子、山口誓子、高野素十とともに四Sと称された。昭和4(1929)年、奈良で創刊する「かつらぎ」に請われて主宰となり、平成2(1990)年、名誉主宰となった。昭和22(1947)年、カトリックに入信し、あるがままに眺めて自在の境地を詠んだ。昭和50(1975)年、勲四等瑞宝章を受章した。(『俳文学大辞典』29 - 30頁)

岡安迷子

『岡安迷子全俳句集』(1984・5 藍発行所)がある。(アマゾンジャパン HP <https://www.amazon.co.jp/%E5%B2%A1%E5%AE%89%E8%BF%B7%E5%AD%90%E5%85%A8%E4%BF%B3%E5%8F%A5%E9%9B%86-1984%E5%B9%B4-%E5%B2%A1%E5%AE%89-%E8%BF%B7%E5%AD%90/dp/B000J7096O> 2020・5・24日)

杉良介

句集『紙舟』(現代俳句新鋭集)(1986・1 東京美術)、句集『四神』(梅里俳句選書・平成の風韻)(2007・2 梅里書房)がある。(アマゾンジャパン HP https://www.amazon.co.jp/product/4808703246/ref=dba_def_rwt_bibl_vppi_il https://www.amazon.co.jp/product/4872273036/ref=dba_def_rwt_hsch_vapi_taft_pl_i0 2020・5・24日)

野村喜舟

明治19(1886)年、金沢に生まれ、東京で育つ。昭和58(1983)年没。明治末期、『国民俳壇』に投句し、松根東洋城の望遠館句会に出席した。大正4(1915)年、東洋城主宰の「洪柿」創刊で選者となり、昭和27(1952)年に主宰となる。昭和42(1967)年に紫綬褒章を受けて、俳人協会顧問となり、昭和49(1974)年に勲四等旭日小綬章を受けた。(『俳文学大辞典』663頁)

藤田湘子

大正15(1926)年、神奈川県生まれ。平成17(2005)年没。昭和18(1943)年、水原秋桜子の「馬酔木」に投句し、昭和24(1949)

年に同人、昭和32(1957)年から編集長となった。昭和39(1964)年に「鷹」創刊し、昭和43(1968)年から主宰した。(『俳文学大辞典』807頁)

松根東洋城

明治11(1878)年、東京生まれ。昭和39(1964)年没。伊予国宇和島藩家老職の家系で、明治39(1906)年、宮内省に入った。「ホトトギス」で活動した後、大正3(1914)年、「洪柿」を創刊主宰した。昭和27(1952)年に引退し、昭和29(1954)年、芸術院会員となった。(『俳文学大辞典』864頁)

Nasu in Haiku: The Influence of Westernization and Modernization

MATSUI Takako

Abstract

Nasu is the north-east area in Tochigi prefecture with a long history and famous for its beautiful nature and hot springs. People in Nasu are greatly proud of their home place. The westernization and modernization led by the Imperial Japanese government during the Meiji era in the second half of the 19th century affected the daily life in Nasu as much as another place in Japan.

Most of modern Haiku include kigo, seasonal words which express seasonal feelings. Kigo is an extremely important element to construct the world of every haiku because the terms contain the historically cultivated traditional meanings. In spite of this fact, there was not any swimming against the current of civilization and enlightenment in the Meiji Restoration. Kigo has followed the changes in the time and varied.

Since the Edo period when haiku became popular, many haiku poets have visited Nasu and described the natural beauty of the district with their haiku eyes. The beauty includes both things modern and premodern. The characteristic points of modernity in Nasu are cows and warhorses in stock farms and the Imperial villa.

In conclusion, haiku composed in Nasu region include both modern and premodern which feature is that things premodern were never overwhelmed by things modern. Even in the 21st century, Japanese authentic feelings survive in traditional custom retained in premodern lifestyle.

(2020年6月1日受理)